覚書

なばや なばや

―村里の庭先でのこども劇―

拾録　羽柴　弘

（解説）これは村里でのこども野外劇、いや庭先でのこどものお芝居である。私もこどものころ、この劇団の一人のなばになり、幼ない胸をワクワクさせたことがある。今もどこかに残っているであろうか。

なば（推背）に肥料をかけるかって、そのせんさくはいらない。なばはいっさい口をきかない。簡単な身振りだけ。だから、五才・三才の幼児も参加出来るのがよい。

なば師と泥棒のせりふは、ふだん使っている方言なまりを、そのままつかう。

舞台―とある農家の縁先、かつら石をなばのぼった場と見立て、大小の子供入り交ってなばになり、ずらりと腰かけて並ぶ。

なば師は紺屋の方、泥棒は横手の物かげに。

観客は、女の子やおばあさんたち。なくてもよいが、やっているうちに追々ふえる。

登場人物

なば師（主役）　殆んど独演に近く芸達者なものがなる。

泥棒　なばになるこども（五～一〇人　幼児も可）

第一景

なば師（登場・手にバケツ・ひしゃくを持っている）

あーア、今日はいい天気じゃきィ、ぼた場の見廻りに来た。

おう、大えんかりこんめ、えやつまじ、よいけなばが生えよるわい。水肥（ごえ）んうすいんでんかけてやろうか。（なばに順々に肥をかける、なばの人数だけくり返す）

エー　なァば　肥かけ、　なァば　肥かけ、

エー　なァば　肥かけ、　なァば　肥かけ、

（かけられたなばは、鼻をつまむ）

この頃ア　雨が少ねえきィ、水もかけてやろう。

なばなば　ふとれ、　水ゥすうて　ふとれ、

なばなば　ふとれ、　水ゥすうて　ふとれ、

（水をかけられたなばは目をパチパチやる、そして少し腰をあげて脊を高くする）

おう、だいぶん大きいのもある。あしたァもいで町に売りィ行くことにしようか。

まてよ、数ゥ数えちょこう。（なばの頭を押えながら）

一ウつ、二ァつ、三つ、四つ、五つ（と一々数える）

あァ　みんなでれっちゃるわい。もうやがて昼じゃァ、帰るどしようか。（引っこむ）

泥棒（そっと物陰から登場、伸び上ってあたりを見まわし、抜足でボタ場にやって来て、目ぼしいなばをとって行く。なば（人数）の少ない時は一回に一人づつ、多いときは一度に二人位手をつながせて　つれ去る）

第二景

なば師（前回と同じ道具をもって登場）
あァ今日もいい天気。今日はちっとうもいで帰ろうか。
おや、なばが少のうなっちよる。ここのはどうなったかな。誰がもいだか、跡がある。（薄のなばに）お前知らんか。（なばかぶりをふる）数えて見ろう。一オつ、二ァつ、三つ、四つ（と順々に数える）
ここのも無うなっちよる。（とあちこちさがす）
お前どうなったか知らんか。（なば、かぶりをふるが、たずねた相手が三四才の子供の時には物陰を指さして「あっこに、いちよる」と大声で教えてみんなを笑わせることがある）
こりやァもいで売りに行けん、まあ肥でもかけとこうか。
エー　なァば　肥かけ、　なァば　肥かけ、
エー　なァば　肥かけ、　なァば　肥かけ、
雨が降らんき　水もかけてやろう。
なばなば　ふとれ、　水うすうて　ふとれ、
なばなば　ふとれ、　水うすうて　ふとれ、
（なばの人数一ぱいくりかえす、鼻をつまんで臭い動作をし、目をパチクリし、腰を落かせて成長する）
だいぶ大きうなった。明日ァもいじ売りに行くことにしよう。（引っこむ、やゝあって泥棒登場、またなばをとって行く）

第三景以下

（この動作を、なばのなくなるまでくり返す。、せりふ次々に少しづつかわるとよい。なばみんなとられてしまう。舞台しばらく空白）

最終景

泥棒、なば売りになって登場、なばを大小の順に手とつながして引っ張って出て来る。

泥棒（なばをぞろぞろ引き連れて、売り声高らかに舞台をめぐる）
なばや　なばやァ、　なばや　なばやァ
なばァいとんなァ、　なばァ買わんなァ
なばァ安くしちよくでエ

なば師（家から出てくる）
まあ、えれエ　ふてえこと　なばを――――
泥棒　なばを買うチくだんせ、安うまけちよくで――――
なば師（じろじろなばを見まわして）
どうもこんなばァ、見覚えンあるなばじやァ、
泥棒　もし、こりあどこん山んなばかな。
なば師（大声で）そらァうちんなばじやァ（その部落の名を言う）
うちんなばじやァ
（と追っかける。次のなば師になる子をつかまえる）

（エピローグ）
以上が初回。今度はなば師がかわり、泥棒もかわって第二回を上演、これをくりかえす。
せりふは、回を重ねるにつれ変化することが望ましいが、ふざけることは禁物である。
なばが、尋ねられると返事をするようにしてもよい。
「くさい、くさい」と言いながら鼻をつまむのも面白い。
村の広場、お宮の石段、お寺の境内などで、くりかえし、くりかえし――――。

（おわり）